慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新堀通也著『ルソー再興』 小笠原弘親著『初期ルソーの政治思想』
Sub Title	M. Shinbori, J.=J. Rousseau resurrected H. Ogasawara, The political thought of the early Rousseau
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1980
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.53, No.2 (1980. 2) ,p.151- 158
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19800215-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

新堀通也 著
『ルソー再興』

小笠原弘親 著
『初期ルソーの政治思想』

一

「すべては根源的に政治につながる」というルソーの『告白』中の言葉は、樋口謹一教授が指摘されるように、「すべての悪は、人間そのものよりも、悪い政治のもとにある人間に属する」（『ナルシス序文』）、「人間は、自然的には善良であり、人びとが邪悪になるのはただ社会制度のためである」（「マルゼルブへの手紙」）などとともに、『社会契約論』の冒頭の問題性を示唆している。「人間は自由なものとして生まれた、しかもいたるところで鉄鎖につながれている。自分が他の人びとの主人であると思つているようなものも、実はその人びと以上に奴隷なのだ」と。それゆえに、かかる普遍的な疎外は、「ルソーの死後二〇〇年の現代にもなお解消されていない。そのかぎり、わたしたちはなお、ルソーの政治思想の射程内に生きているのである」（『ルソーの政治思想』一九七八年、世界理想社三二頁）。そして、まさに没後二百年記念として企てられた『ルソー全集』十四巻の刊行（白水社）こそ、われわれがルソーに問いかけ、彼に新たな光を投ずることを可能ならしめ、彼の思想像全体への現代的理解を深化させることであろう。

ところで、今後のルソー研究のさきがけとして、またそのための不可欠な文献として、上述の樋口謹一『ルソーの政治思想』をも含めて、最近、次のような注目すべき著作が相ついであらわれた。B・グレトウイゼン『ジャン＝ジャック・ルソー』（一九七八年・法政大学出版局）、R・ドゥラテ『ルソーの合理主義』（一九七八年、木鐸社）の二つの翻訳、およびわが国のルソー研究者による二つの著書、新堀通也『ルソー再興』（一九七九年、福村出版）、小笠原弘親『初期ルソーの政治思想』（一九七九年、御茶の水書房）がそれである。ここでは、後者の二書を採りあげてみたい。

二

『ルソー再興』というタイトルに著者が託している意味は、なによりも先ず、「民主主義の問題にせよ平和の問題にせよ自然の問題にせよ疎外の問題にせよ、途方もない規模、新しい様相をもつて立ち現われるに至つた現代、いわば原点に帰り初心に戻つてルソーに尋ね直すことが必要であろう。ルソーが問題にした これらの問題は現在なお、いやいつそう切実深刻になつているのだから、ルソー

の解答を今こそ真剣に読み直してみる必要がある。ルソーは現代においてこそ再興されねばならぬ」と、「まえがき」に記されているとおりである。そして著者は、ルソー再興への途として、彼の「魂の内部に入り込み」、その精神構造をトータルに把握しようと試みたのであつて、再興とは「私によるルソーの再構成」――「再構」と「再考」――なのである。本書が、いわゆる「科学的な」ルソー研究の専門書とは趣きを異にし、新堀教授独自のルソー論となつているゆえんである。この点――すなわち、本書の「出発点」をなしているが――を、著者自身の言葉にそくして述べておこう。

ルソーは、人類の精神史に天翔ける超俗的な哲学者ではなく、パスカル、キェルケゴール、ニーチェ、ドストエフスキーなどと同じく、「悩み、苦しみ、感じ、生きる具体的な個別的な肉体的な全体的な流動的な魂の世界」の問題と取り組んだ「実存的」思想家であつた（九頁）。彼が求めてやまなかつたのは、「主体的な真理」であつて、抽象的客観性とか普遍妥当的な法則にもとづく学問の知識や理論ではなかつた。ルソーの思想が「かれの魂の叫び声」であることを、我が身に引き受けようとすれば、「客観的な真理を見出そうとする学問のわくを遥かにふみ越え、矛盾した要求が並列しているかれの思想を統一的に把握する」という困難な課題を担わなければならない。「その努力によつて、ルソーがわたくしの魂に入つてくるということは、とりも直さずわたくしがわたくしの魂をそれだけ取り戻したことになる」（十八頁）と強調する著者は、いわばルソーと主体的にかかわつていくのである。

本書においては、ルソーの人格形成、時代背景、社会状況、思想的系譜、さらには彼の影響や批判に関する従来の研究史上の業績、あるいはそれらが提起する諸問題に関してはあえて触れられていない。その理由はもつぱら、「ルソーに眼を向けることは、たしかに人間を根源的に考えようとする意志を人々に起こさしめる」（十九頁）ためである。したがつて、「本書が現在のルソー学者の吟味に耐えうるかどうかにはまつたく自信はない」としながらも、他方で「ルソー再興にとつて何らかの示唆ないし刺戟になりはしないかという私の密かな自負であり自信である」（ii頁）と言われる。このように、自我への真摯な関心をルソーと分ちあう著者は、人間性の回復をめざす彼の教育思想の核心にあるものを明確化し、現代の教育者へ訴えかけようと目論見るのである。ルソーの第一論文における文明批判の根底にあるモラリズムの立場、その原理が社会・政治的問題の実践的関心へと展開していく一貫したプロセスが、第一章　ルソーの思惟形式、第二章　自己観察、第三章　人間、第四章　社会において描出される。その筆致は、著者みずから心がけたという「ルソー的文体」による文章表現によつて、流麗かつ平明である。以下の結論部分は、本書の特徴をうかがい知るに充分であろう。

「……いずれにしてもルソーの場合、次のことだけはいえる。すなわち政治も教育も共に国家の事柄であつて、しかもその目標はあくまで国家ではなくして人間の魂の問題、失われた自我の回復にあるということがそれだ。……具体的にいえば理想概念として

の自然人がもつていた自由、平等、幸福、独立、平和、善などを社会において回復するとともに、それに加えて社会人のみがもち得る徳を実現することだ。ルソーは人間の復興を社会の復興によつてなし遂げようと試みたのである。出発点（それは同時に到達すべき目標でもある）を個人におきながら、それに至る方法としては社会を発見したのである。」「そしてこの点に今日のわたくしどもは大きな教訓を見出すことができよう。今日のわたくしどもはたしかにルソーが見た社会人と同じように、否、それ以上に、誇張でなしに自我喪失の状態にある。わたくしどもはまずその自我の状態をふり返つて自我を回復しようという意志を振い起こさねばなるまい。だが同時に、わたくしどもが自我を喪失せざるを得ないような状態に追いこまれていることも否定できない。わたくしどもをそのような状態に追いこんだもの、それは機械文明だとか、国家主義だとか、資本主義だとか、文化と文明との不均衡だとか、いろいろと説明されている。いずれにしても、その状態がわたくしども個人の力ではどうにも解決できないものから大部分おこつていることだけは確実である。……わたくしどもは個人としては弱い。この弱さを補い得るものはわたくしどもの団結による以外にないだろう。いいかえれば、社会を理想化しない限り、わたくしどもの自我回復の努力には明らかに限界がある。わたくしどもは今やルソーから個人の自我喪失とは社会の自我喪失であることを教えられる。自我を見つめる者は同時に社会を見つめねばならないことを教えられる。ルソーのいい方を真似ていえば、わたくしどもは今や改めて一般意志に問いかけて社会契約をやり直すべき時期に到達している」（一六〇―一六一頁）。

なお、本書には「補稿」として、「ルソーにおける契約概念の発展」「国家と教育――ルソーの場合」「ルソーの道徳教育思想」の三篇が収録されている。最後の論文のなかで、著者はキェルケゴールとルソーとを対比しながら、彼らが理性と進歩、それらがもたらした自己疎外という現代的問題に対して、いかに否定的にプロテストしたか、を明らかにしている。ここで「懺悔の問題」について、彼らの哲学が、その罪意識なくしてはあり得ず、しかもルソーの告白は晩年に至つて純粋な形でなされ、初期はむしろ文明批評が中心であつたが、キェルケゴールの場合はその逆に、匿名の告白的著述にはじまり、文明批評的色彩の強い教会批判は後期に行われた、と指摘されている。そして、「疎外を問題とし、危機を問題にする哲学は今日、一方では社会学に、他方では神学に、発展していつているが、その原型はすでにルソーとキェルケゴールの懺悔の様式に暗示されている」（二四五頁）という論点は興味深い。

三

『初期ルソーの政治思想』は、『ルソー再興』の基調とは対照的に、アカデミックな精度の高い研究書である。その構成を示せば、序章　精神態度の形成と展開（一七三一―一七四九）、第一章　『学問・芸術論』期の政治思想（一七四九―一七五三）、第二章　体制批判の前提（一）――〈歴史分析〉の基礎視角、第三章　体制批判の前提

（二）――自然状態と〈bonté naturelle〉の問題、第四章　体制批判の論理（一）――歴史観の問題、第五章　体制批判の論理（二）――政治社会の歴史的本質、第六章　結びにかえて――あるべき政治社会の構想、付論　モンテスキューおよびルソーの政治的自由論――絶対王制批判との関連において――よりなつている。本書の著者のルソー理解の方法は、まさに学究に相応しきものである。すなわち、

「政治思想に限らず、およそ個別思想家の思想を内在的に、しかもその全体像において把握しようとするばあい、われわれが採りうるひとつの、おそらくはもつとも確実な方法は、その思想の生成過程を諸作品の執筆時期に即してあとづけることであろう。いわゆる追体験的再構成の方法である。ルソーの全生涯からみれば限られた期間ではあるが、わたくしが主論文で採つたのはこのような方法である。そこにおいてわたくしは思想家としてのルソーの名を一躍高からしめた『学問・芸術論』を中に挾んで、この作品に先立つてあつたルソーにおける精神の営為を、またこの作品をめぐる論争期を経て『人間不平等起源論』へといたるルソーの歩みを、断片類、書簡をもふくめた各作品の執筆時期にできるかぎり忠実に沿いながら、体制批制者としてのルソーの生成過程に焦点を絞つてあとづけようと試みた。わたくしがもつとも留意したのは成熟した思想の立場から（ルソーのばあい、それは政治・社会思想についていえば『社会契約論』と『エミール』の立場であろう）、この過程を整理するのではなく、あくまでもそれぞれの時期における思想の生成に立ち会うということであつた。それは追体験的再構成の方法を採るばあいに要求される最小限の条件となるからである。ここでわたくしが思想（史）研究における常道ともいえるこのような方法をことさらに強調するのは、百年になんなんとする歴史をもち、決して少なくない蓄積を誇りうるわが国のルソー研究において、このような方法にもとづく研究があまりにも少ないのではないかという不満と疑問にもとづいてのことである……」（i―ii）。

本書のテーマをなす「初期ルソー」という時期の画定に関して、著者は、M・エイナウディ（Mario Einaudi, *The Early Rousseau*, Cornell University Press, 1967）が一七三七年から五六年までをルソー思想のひとつのサイクルと解釈している見解に対して、『対話、ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』におけるルソーの証言にもとづき、「初期の諸著作」つまり『学問・芸術論』から『人間不平等起源論』にいたる過程を「ルソーにおける体制批判の思想原理の確立期」――本書のサブ・タイトルは「体制批判者としてのルソー」である――として把握するとともに、それ以前に遡つて、かかる批判を準備した精神態度の形成期を確定しようと努めている。ここにも、ルソーへ接近する著者の厳密な態度と鋭い問題意識が如実に示されている。

「なぜ一七三〇年ないし三一年なのかといえば、ルソーが書き残したものを求めようとすれば、この時期以上に遡れないからである。伝記あるいは自伝類（たとえば『告白』）に依拠した解釈や心

理主義に傾斜したそれを採らずに、あくまでルソーが書き残したテクストに内在しようとするかぎり、一七三〇ないし三一年の時点が上限となるのである。こうしてわたくしは一七三一―五五年の時期を初期ルソーの時期として、さらにこれを体制批判者としてのルソーの生成過程としてとらえた。そのばあい、わたくしが体制批判に焦点を絞ったのは、文化、社会、経済、政治を包摂した総体としての体制が行き詰つたとき、一人の思想家がこの矛盾にみちた体制をいかなる思想と論理をもつて批判していこうとしたか、を確かめたかつたからである。思想が思想としての光彩を放つのはその根底的な批判作業においてであり、時代と状況（それが大状況であれ小状況であれ）に追随する思想はおよそ思想の名に値せず、それは現存体制に安住する精神の怠惰でしかない。様々な批判を投げかけながらも、なお人びとの意識が伝統と権威の呪縛から脱し切れない時代にあつて、ルソーは鋭敏な感受性をもつて、またそれをもつたがゆえに、体制の不正と悪に自ら傷つきながら、この体制が孕む諸矛盾を仮借なく問い詰めていつた数少ない思想家の一人であつた。このような問題意識をもつて体制批判者としてのルソーの軌跡を追いながら、同時にわたくしは、この作業のなかから『社会契約論』への展開の道筋（ヒンク）をつかむという意図を併せもつていた」（iii頁）。

著者が企てようとするのは、ルソー思想の初期的形成をクロノロジカルに跡づけることではない。それゆえ、本書においては、ルソーの詩作や劇作の作品群がいつ執筆されたか、という問題を取り扱つてはいない。また例えば、ヴァラン夫人の庇護のもとでの甘美な生活とルソーの生の内面的感情に対して、精神分析的解釈を加えるような描写も、いつさい回避されている。ジュネーヴ出奔後の約十年間をルソーの生涯のなかで「ひとつの転換を告げる」時期として、著者はこれをシャンベリ時代（一九三一―四〇年）とリヨン・パリ時代（一七四〇―四九年）とに区切つて論じる。その際に、ルソーの「精精の傾向」が探られ、彼自身の「自己洞察」と「自己教育」――「道徳的に自律した一個の人格」たろうとする意志と「学問を通じての心情の形成と魂の救済」への希求が明らかにされる。そして、デュパン家においての秘書体験が彼の精神に及ぼした重大な影響について、次のように摘要されている。「これらの体験を通じて、ルソーは学問、芸術の華で飾られた文明社会の実態を内側から観察し、また富者の生活を身近かにみることができた。『学問・芸術論』以降、堰を切つたように流れだす文明社会批判や不平等批判はこの時期の屈折した体験を抜きにしてはありえないであろう」（一一頁）と。

〈ヴァンセンヌの啓示〉を契機として、われわれは「思想家としてのルソーの生誕」に立ち会う。『学問・芸術論』における批判を支える論理、ならびにその思想内容は〈徳〉という観念である。著者によれば、それにはすぐれて「政治的な性格」が付与されていたのであり、ルソーにおいて政治と倫理の問題が密接に結びついていたことを証示している。さらに、ルソーの学問批判には、学問対〈無知〉という視角設定があつて、文明の進歩に対応する道徳的退

廃というペシミズムがそこに付きまとうていたが、逆に、啓蒙的理性支配の道具としての現代の学問を「残忍で狂暴な無知」として告発するルソーは、「理をわきまえた無知」を擁護する民衆的立場にたつていたことがあらわにされる。次いで著者は、学問芸術批判の延長上に、『ポーランド王への回答』にみられる「奢侈批判」を位置づけ、「文明批判から体制批判へ」の視点移行を示唆する。この第二期の「ルソー政治思想の決定的飛躍」を可能ならしめた、最も重要な意味をもつものは『ナルシス』序文の一節である。すなわち、「すべてこれらの悪徳は人間よりも、悪く治められている人間に属する」ということ――これがルソーに投げかけた問題は、〈徳〉と〈無知〉を以て充分に答えられるものではなく、「第一に、善なる存在としての人間像を原始の世界のなかに求めていくことによつて、原始の世界とそこにおける人間像を積極的に構想すること、第二に、その原始の世界における人間がいかにして〈文明人〉へと変質していくかを〈歴史的〉にあとづけること」（九九頁）が、ルソーにとつての新たな課題となつたのである。

四

かくて、体制批判の前提としての〈歴史分析〉と、体制批判の論理としての〈歴史観〉の確立という『不平等起源論』の中心的なテーマが導き出されてくる。今これらの緻密な議論をここで述べる余裕はないが、『人間不平等論』において、「人間が第一自然状態を離れて、徐々に文明状態、国家状態へと進化していく、その各局面において人間の行動様式とそこに成立する社会関係を分析し、評価していくさいの、基本的な概念として機能していた」〈依存関係〉（一一六頁）について著者が展開しているルソーの論理に注目しておきたい。

ルソーの自然状態論の特質は、〈人への依存〉を原理的に否定し、〈物への依存〉によつて貫かれた、自然人の純粋な孤立状態として把えられている。したがつて、「現体制下における〈人への依存〉を〈物への依存〉へと転化させようと試みたものが『社会契約論』であつたとすれば、〈物への依存〉から〈人への依存〉が歴史的にどのようなプロセスを経て形成されたのかを問うていつたものが『不平等起源論』にほかならない」（一二三頁）。そして、この〈依存関係〉は、文明の完成期にあつては、人間の精神的―道徳的側面からみれば、「すべての価値が〈paraître〉に収斂する世界」において、文明人の救い難い自己喪失としてあらわれ、経済的側面からみれば、それは分業の開始とともにはじまり、富者と貧者、労働を媒介とする主人と奴隷の関係としてあらわれる。まさに文明社会に確立された〈依存関係〉は、『不平等起源論』の歴史過程を分析することによつて、「『学問・芸術論』以来の文化批判を深化させ、文化を担う人間の疎外とそのような人間が形成していく様々な社会関係とそこから生れる悪の問題を、歴史的に基礎づけていつた」（一九五頁）と言える。

著者が指摘しているように、「富者と貧者との経済的な〈依存関係〉は自らを政治的な支配―服従関係へと転化していく必然性をす

でに内在させているとみなければならない」（二三〇頁）。『不平等起源論』第二部の冒頭の「土地に囲いをして、〈これはわたしのものだ〉ということを思いつき、それをそのまま信じるほど単純な人びとを見出した最初の人が政治社会の真の創設者であつた。……」という象徴的な言葉は、ルソーの政治批判の論理を基本的に規定するものである。しかも、ルソーによれば、政治社会への移行そのものは、富者のイニシアティヴ――その成立当初は〈契約〉という手続きによつて――のもとに余儀なくされ、つづく「政府契約」と法の支配なるものも、富者の特殊利害を保障する権力機構、不平等の制度化にとどまらざるを得ない。とすれば、「……政治社会は、まず結合契約を通じて、それを形成するすべての成員にとつて共通の利害を体現するかのごとき仮象をもつて成立する。しかしながら……ここにおける政治社会および全成員を義務づける法の支配も、これを要請した〈依約関係〉に規定されて、その階級性を免れず、したがつて〈依存関係〉を真の共同性として整序し、止揚するものではない。この意味において、ルソーが把握した政治社会の歴史的本質は幻想的な共同性という点に求めることができる」（二三二頁）。

政治社会の統治の歴史の最後に登場するものは、赤裸々な「力と情念」の支配する専制主義である。ルソーはこれを「新しい自然状態」と呼ぶが、「純粋な自然状態」における自由、平等、自然的善性がまつたく否定された、その疎外態にほかならない。『不平等起源論』の時期までにルソーが到達したのは、「人間性の歴史性であり、そこから帰結する歴史の不可逆性」（二三九頁）であつたから、歴史のなかには、破滅の途以外に救済は存在しないかにみえる。だが、著者は『不平等起源論』に付されたジュネーヴ共和国への「献辞」を手がかりに、救済の条件を探ろうと試みている。それは、ローマ人民の事例に暗示されるように、革命によつて圧制から解放されるときに働きかける「最高の叡知」であるかも知れない。あるいは、スパルタにおけるリュクルゴス――立法者の出現が、かすかな展望を与えてくれるかにみえる。さらに著者は、最後の結びにおいて「献辞」のなかには〈依存関係〉を止揚する論理を直接見出すことはできないけれども、「独立自営の生産者」という市民像にそれが求められること、また「献辞」以前の執筆と推定される断片からは、〈依存関係〉に対する政治社会のあり方を「平和と繁栄」の約束にルソーが期待していたことを論証している。しかしながら、「真の共同性を実現しうる政治社会はいかなる構成原理にあつて成立するか」は、ルソーにとつて残された課題であつたし、「われわれは、かすかな可能性としてであれ、これまでみてきたような歴史における救済の可能性にその思想家としての実存を賭けて、ルソーは『社会契約論』の構想を温めていつたであろうと推測する」（二四三―四頁）にとどまるのである。著者が意図する次なる書に、ルソーとともにこの問題への解決が与えられるであろうことを、われわれは切望する。

五

以上二つの著述は、いずれもユニークなルソー論であつて、いずれ

がより正しい、あるいはより正当な解釈であるか、といつた評価をくだすことはさし当つての問題ではないであろう。一見、乖離しているかに思える二つのアプローチも、ルソー思想そのものを誤りなきものと仮定している限りにおいて、基本的には同様なのである。蛇足ながら次のことを附け加えておく。ルソーの場合だけの問題ではないが、ある思想家の言葉や表現は、読者が己れの欲するままに読み取つてよいわけではなく、もしそれが恣意的に許されれば、思想はまさに実存の「美しい魂」の告白にすぎなくなるし、神話へと解体してしまうであろう。他方で、思想の「追体験的再構成」は、なるほど議論の余地がないようにみえるが、果たして、当の思想家が、思惟の内在的論理のみにしたがつて、その通り完全に思想を展開しえたのかどうか。さらに付け加えれば、これもルソーの思想に限つたことではないけれども、ある思想の批判的理論、そしてそれが確かに普遍的な価値規準なるものを提示しているにせよ、それ自体が——非現実的でもアナクロニズムでもなく——まさに政治的レヴェルにおいて現実化された場合に、外見上の成功はともかくとして、それが唯一の正しさなのだろうか、そしてそれに服従する義務をわれわれに命じることができるのだろうか。蘇えるルソー——マルクスの名をさらに加えてもよいが——は、思想のいわゆる Positivität が内包しているポレーミックな側面を念頭に置かずに、曖昧に考えることはできないであろう。

（『ルソー再興』（A5判、V＋二六四頁、一九七九年　福村出版）、『初期ルソーの政治思想』（A5判、viii＋三三四頁、一九七九年　お茶の水書房）

奈良和重